

あとがき

今回の展覧会は「5人のシュルレアリストとヴォルス」と題し代表的な超現実派の5人の作家、マックス・エルンスト、ルネ・マグリット、ジョアン・ミロ、瀧口修造、イヴ・タンギー、そしてヴォルスのさまざまな作品を展示することになった。6作家ともすでに故人であるが、こうして並べてみるとそれぞれ瀧口修造先生とゆかりのある作家ばかりで、何のことはない来月(7/1~28)開催予定の当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展(今回はマルセル・デュシャン)の前夜祭的な催しとなった観があるのに驚いている。以下各々の作家、作品について若干のコメントを記しておきたい。なお点数が多いため期間中入替えせざるを得ないのでご了承いただきたい。

マックス・エルンスト Max ERNST(1891~1976)

今回はマックス・エルンストのさまざまな手法を紹介する展示となった。すなわち、油彩(1927, 鳥), グワッシュ(1935, 貝の花), コラージュ(1929, カルメル修道会, 1971, 一目惚れ), フロッタージュ(1931, ミスター・ナイフとミス・フォークのための未使用作品, 1950, スナーフ狩りのために)および「博物誌」(1926, コロタイプ)である。版画については15点余の作品を所蔵しているので並べてみたい気持ちがあったが、エルンストの版画についてはすでに5回展覧会を開催していることでもあり今回は割愛した。

ご覧のように1920年から30年代のエルンスト壮年期の力の漲っている時代の作品が多く、モチーフもティピカルで、見応えがある。コラージュの「一目惚れ」(1971)は大型のカラーコラージュで“百頭女”, “慈善週間”, “カルメル修道会”等エルンストのコラージュ・ロマンのコラージュをみてきた私には驚きである。晩年の優品である。

「博物誌」についてはエルンストがマン・レイに贈った作品で、しかも各々にサインが入っている大変珍しいポートフォリオである。本来このポートフォリオは巻末に作者のサインがあるだけであるからこれは珍品である。ただし、このポートフォリオは34点で1セットであるが、どういふ訳か1点No.30が抜けている。甚だ残念であるが、それをおぎなうて余りあるのが、エルンストのマン・レイあ

ての献辞と各作品のサインであろう。これは私の推測であるが、マン・レイはNo.30の作品をフレームに入れて壁にかけ楽しんでいたのでなかろうか。そのうちに忘れてしまってこの作品が欠落したのであろう。あり得る話ではなかろうか。

エルンストといえばエルンストの作品カタログレゾネを作成しているウエルナー・シュピースの名が直ちに思い浮ぶ。この有名なエルンスト学者にこの半年の間に3回逢った。昨年10月、当画廊でお逢いしたのが初めてで、今年1月、フォス夫人の案内でパリ郊外の自宅を訪問したのが2回目である。広いやしきに数点のエルンストの油彩、ドローイングがかかっていたのをさすがと思いうらやましく眺めたものであった。そして3回目は去る4月、ニューヨークのクリストの自宅においてである。シュピースさんはエルンストのほかクリストについても著書があり、またピカソについてもくわしい。小柄であるがなかなか精力的な仕事をしている学者で、私のエルンスト愛好がもたらした逢いか、とこの世界の狭さを感じるのである。

ルネ・マグリット Rene MAGRITTE(1898~1967)

この7点一組のポートフォリオ「対蹠地の黎明」(1966)はアラン・ジュフロワ氏の散文にマグリットが彼のティピカルなモチーフのエッチングを作成したもので、最晩年の作品である。作品を収納しているボックスがステキなオブジェになっていて楽しい。

マグリットの版画は極めて点数が少ない。1982年に刊行されたGilbert E.KAPLAN, Timothy BAUM両氏編集のマグリットの版画カタログ・レゾネによると作成点数はわずか20点に過ぎない。その意味で、このポートフォリオは貴重である。

前出のレゾネ編集者の一人ティムシイ・バウムさんに、この4月、ニューヨークで初めて逢った。仕事場はマンションの一室であるが足の踏み場もないほど、油彩、水彩、ドローイング、版画、オブジェ、書籍、資料等で溢れており、フツ瀧口修造先生の書齋を連想した。先生の書齋を5~6倍に広げた感じである。すべて、シュルレアリスム関係のもので満たされており、ほとんどが小品である。

バウムさんは画商という感じはなく、むしろ学者に近い雰囲気持主である。詩も書いておられるとのことで、瀧口修造のこともすでに承知しておられた。今日逢ったその記念にとマン・レイの「ANALPHABET」NADADA EDITIONS, NY, 1974をいただいた。初対面であるにも

かわらず、われわれは充実した共感の時を分かち合ったのはうれしいことであった。

ジョアン・ミロ Joan MIRO(1893~1983)

ミロの数ある版画のなかから今回は1968,69年のカラーアクアチントの作品を中心にそれ以前のラヴリイな作品を数点まじえ展示した。ミロは1969年にニューヨークの近代美術館MOMAで新作版画展を開催した。出品作品は丁度50点で、1969年の作品が数点の外はすべて1968年の作品で占められ、すべて大版のカラーアクアチントである。ミロはMOMAでの展覧会ということでは張り切り、1968年はこの版画の仕事に専念した。作品のサイズが大きいのもMOMAの空間を念頭に入れたものであることは疑いない。事実、それ以前の彼の版画作品のサイズは概して小さいのである。従ってこの1968,69年の作品は総じて質が高い。私はこの時期のミロの版画を高く評価している。「昼夜均衡点」、「熱狂者」、「沼地の星」、「大魔術師」、「岩壁の軌跡」、「大司祭」等はタブローに負けない力がある。

その他、「ムルロ工房創立百年記念」(1953)の作品は「鏡の前の女」と並びミロのもっとも美しい版画作品のひとつで、私が手にするのは今回が初めてである。ラヴリイな「森番」(1958)、木箱の墨のサインが面白い「りんごの一撃」(1962, ポートフォリオ)も楽しい。ミロはやさしくてスケールの大きい作家である。

瀧口修造 Shuzo TAKIGUCHI(1903~1979)

今回は瀧口先生のデカルコマニー、水彩、ドローイング等10点余を展示することとした。一昨年、当画廊の第5回オマージュ瀧口修造展で瀧口先生の作品を166点(期間中一部入れ替え)を展示したが、その時の熱気を今も忘れることができない。3週間の期間中来廊者は4,000名に及んだとみられる。最終日は500名を越え身動きできぬひとときもあった。しかも来廊者の80%は若い人達であったことに驚いた。瀧口先生には若い人を惹きつける不思議な引力がある。思うにこれは瀧口先生の精神が若々しく若い人と波長が合うためであろう。

七月の第7回オマージュ瀧口修造はマルセル・デュシャン展でただいま準備中である。デュシャンの作品のほかに瀧口修造「デュシャン語録」(1968)の原稿、資料それにラーゼグラスの瀧口修造メモ等を展示の予定である。その展覧会の一ヵ月前に、5人の作家の作品とともに、

わが国のシュルレアリストを代表するかたちで瀧口先生
の作品を並べることになったのはこれも奇しき因縁か、
と私は思う。

イヴ・タンギー Yves TANGUY(1900～1955)

タンギーについては当画廊でこれまで2回展覧会を開
催している。第一回目は当画廊の最初の企画展(1978/
9)で、M.エルンストとの版画2人展であった。二回目は
2年前(1985/11)タンギーの1932年から53年に至る
30点の版画——ほとんどタンギーの全版画と言えよう
——を展示した。

今回は1930年のインキのドローイングと、1945年の
ガッシュおよび1947年のカラーエッチングの3点である。
1965年にピエール・マチスが作成したタンギーの油彩、
ガッシュ(ドローイングは含まれていない)のカatalogレゾ
ネによると作品の最終番号は463番であるから、洩れが
あってもタンギーの生涯にわたる作品は500点ぐらいの
ものであろう。彼は55歳の若さで亡くなっていることもあ
り作品の数は少ないのである。

タンギーの切れ味のよいドローイング、そして太古の
原風景にわれわれを誘うガッシュに私は目が覚める思
いがする。

ヴォルス WOLS(1913～51)

ヴォルスと言うとただちに私は瀧口修造他著「ヴォル
ス」1964年みすず書房を思い出す。この本は色刷りの
ヴォルスの絵が12点別冊で添えられている当時の豪華
本で価格は5,800円と高かった。しばらくは神保町の古
本屋でよく見かけたが、ただいまは全くその姿を見ない。

この本にJ.P.サルトルの「指と指ならざるも」と題する
ヴォルス論が収録されている。その一節を今も私は憶え
ている。「クレイは天使であり、ヴォルスはあわれな悪魔
である。」と、続いてサルトルは次のように続ける。「前者
はこの世界のかずかずの不可思議を創造ないし再創造
する。後者はその不可思議な恐怖を味わう。前者のす
べての幸運は、幸福がつねに彼の限界になるという彼
のただひとつの不運を作った。後者のすべての不運は、
彼に、その不幸がなんの限界も持たぬという唯一の幸
運を与えている。」と、クレイから出発したヴォルスは世界
の深淵をのぞいた作家なのだ。

ヴォルスは絵を画く前、じいっと目をつむる。すると彼

の右目の下の部分にイメージが湧いてきた、と言う。

「見ること、それは目を閉じることだ」

「指と手の動きは、それだけですべてを表すことがで
きる」

「ほんの小さな紙の切れっぱしでも世界をつつむこと
ができる」

以上はヴォルス自身の言葉である。

彼は今回展示の作家のなかでは誰よりも遅く生れ、
もっとも早く38歳で亡くなった。音楽家の素質があり、写
真家としても一流であったこの放浪の画家はシュルレ
アリズムの強い影響を受けたが、シュルレアリストではな
い。サルトルも言っているように彼は文学とは全く縁がな
いからである。しかし彼の線描をみるとオートマティスム
的なところがありシュルレアリスム的である。

瀧口修造はそのヴォルス論で、次のように述べている。
「ヴォルスの絵画はどう考えても出来あがってしまった「絵
画」ではない。蚕の糸か、蜘蛛の糸のように指から吐き
出さねばならなかった糸デッサンとでもいったものがヴォ
ルスの絵のはじまりであったのではないか。」と。事実、
今回展示の7点の細いペンで描かれた線描のグワッ
シュをみると余りにもその線が細く、こんな細い線が描
けるペンが世の中に存在するのか、と考え込んでしまう
ほどである。まさしく蚕の糸か蜘蛛の糸で描かれた作品
なのだと納得した次第である。

過日、西ドイツの美術館の方が3人来廊される機会
があったが、たまたまこの7点のヴォルスの水彩をみて興
奮している情景をみて面白かった。東京でヴォルスをみ
ようとは思いつけないことであつたに違いない。値段は
いくらか、どこから手に入れたのか、と熱心であつた。さ
て、わが国ではどんな反響があるか、それともないか、
面白いところだなと私は思っている。

1987年5月12日

佐谷画廊 佐谷和彦